

「比較スポーツ文化論」序説

—スポーツ文化の人文・社会科学的アプローチ—

稲垣正浩*

(平成8年9月26日受付, 平成8年12月3日受理)

Introduction to “the Theory for Comparative Sports Culture”

—Human/Social Scientific Approach for Sports Culture—

Masahiro INAGAKI

Generally speaking, the times of “today” which we are spending now is said to be the switchover time from “modern” to “post modern”. Sports culture is also being in change from sports culture of modern to sports culture of post modern. However, the research method of sports culture have been hardly changed. As well as there was a modern method for modern times, post modern method is needed on post modern times. Presentation of new theory for sports culture which stands on such recognition is “the theory for comparative sports culture”.

In this argument, first I made the authority clear that proof how “the theory for comparative sports culture” is needed, after that I specified the structure of sports culture and the view point of “comparison”, and at last I investigated about the study field which prop up the “theory for comparative sports culture”. As for its result, several things were becoming clearly. They are stated below.

I. To grope for sports culture which sublate “competitive principle”, “the theory for comparative sports culture” which stands on holistic field of vision is necessary.

II. On “the theory for comparative sports culture”, the structure of sports culture and the view point of “comparison” are in relation of making up for mutual loss, and both of them are gradually becoming minute by having effect on each other.

III. The study field which comes to the kernel of “the theory for comparative sports culture” is “the sports history”, and for its supporting study field, there are sports philosophy, sports anthropology, I assume.

IV. Other study field of Human/Social science are demanded to develop interdisciplinary study field while keeping an interactive relationship.

V. For the new study field, I assume that to form the sports information study and the science of sports religion is important.

VI. However, the most important thing as for the backbone of “the theory for comparative sports culture” is “current thought”. What it all comes down to is that how well being informed about “current thought” holds the conclusive meaning for researchers.

Considering the circumstances mentioned above, to form “the theory for comparative sports culture” is a pressing need on considering the sports culture of post modern.

I. 課題の設定

スポーツ文化¹⁾が大きく様変わりしつつある。このことは、歴史、とりわけ、世界史の大変動とリンクした、とてつもない規模の変化の様相を示しはじめている。いま、まさに、スポーツ文化の大転換期なのである²⁾。

かつては、競技スポーツ³⁾をピラミッドの頂点にすえ、大衆スポーツをその底辺におく、スポーツ文化の価値の序列化がまかりとおっていた。しかし、こんにちでは、競技スポーツを志向する人びとや生涯スポーツを志向する人びと、そして、健康の保持増進のための健康スポー

*日本体育大学非常勤講師

ッを志向する人びと、等々、スポーツ文化を享受する人びとの多様化現象が進展している。こうした時代の要請に呼応するかのようにニュー・スポーツなるものがつぎつぎに登場しつつある⁴⁾。

これらの現象は、簡単にいってしまえば、スポーツ文化の「近代」からの逸脱であり、スポーツ文化の「後近代」⁵⁾のはじまりを意味する。スポーツ文化の「現在」とは、そういう意味の大転換期なのである。

このことの意味はつぎのようにも説明が可能である。

たとえば、ニュー・スポーツ現象をいろいろ検証してみれば明かなように、スポーツ文化そのものの多様化と変容の実態が見えてくる。すなわち、競技スポーツをピラミッドの頂点にすえる近代スポーツにはかならずしも収束しない、まったく別種のスポーツ文化が登場しているのである。それらは、技術革新の成果としてはじめて可能となったスポーツ文化であったり、これまで民族スポーツのなかに埋没していたわれわれの視野の外にあったものへの関心（郷愁？）であったり、あるいはまた、インドのヨーガや中国古来の気功術にかかわる身体技法への注目であったり、という具合である。つまり、人類史上初めて到達した未知のスポーツの時・空間への進展と、異文化や過去の人類の記憶のなかに温存されていた身体技法への回帰という二面性をもっている。

もう1つ視点を変えてみれば、つぎのようにも説明できる。

長い人類史的な視座に立つ時、スポーツ文化は、前近代と近代という時代を通過して、それまでとは異なるまったく新しい時代に突入した、という認識である。すなわち、いまや、これまでのスポーツ文化の見方や考え方では把握しえない、まるで異なる範疇のスポーツ文化が登場してきている、という認識である。この認識が正しいとすれば、これまでのスポーツ文化研究の方法はもはや通用しない、ということになる。しかれば、これまでとはまったく異なる新しい研究方法論が模索されねばならなくなる⁶⁾。

このように、こんにちのスポーツ文化の進展が「近代」から「後近代」へ1つずれてきたという認識に立つ時、新しく立ち現れつつあるスポーツ文化の全体像を捉えながら、その変容の実態を明らかにしていく研究方法論が必要になる。こうした状況に対応するための、現段階での研究方法論の提示、それが「比較スポーツ文化論」なのである。すなわち、「後近代」のスポーツ文化に人文・社会科学のあらゆる学問分野を動員して接近するための方法論の模索、それが「比較スポーツ文化論」の意図するところである。

このような動向は、その認識の度合いに多少の違いはあるものの、しばらく以前からあった。それらの主なものを紹介しておく以下になるよう。

まずは、岸野雄三の仕事に注目したい。岸野雄三の仕事は、すべからく「世界」認識の仕方にその原点をっており、刻々と変化する国際情勢や思想・哲学の最先端の論議に敏感に反応しながら、独自の「歴史」認識を形成することによって成立している。細部については割愛せざるをえないが、『体育の文化史』⁷⁾、『体育史』⁸⁾、『スポーツの科学的原理』⁹⁾、『序説運動学』¹⁰⁾、『スポーツの技術史』¹¹⁾、などの一連の著作がそのことを如実に物語っている。さらに、早い時期での「スポーツ人類学」への着眼もその一端を示している¹²⁾。

筆者がこれから試みようとしている「比較スポーツ文化論」もまた、岸野雄三の仕事に啓発されてのものであり、岸野史学の延長線上にあるものといって過言ではない。

つぎに、われわれの関心事に近い、関連諸学のなかでは「歴史人類学」¹³⁾、「歴史民俗学」¹⁴⁾、「比較文明学」¹⁵⁾、「比較神話学」¹⁶⁾、「宗教民俗学」¹⁷⁾、「人体科学」¹⁸⁾、「ニュー・サイエンス」¹⁹⁾、などが注目に値する。これらの1つひとつを俎上に乗せて論ずるだけの余裕はないが、いずれも、これまでの研究方法論では解決しえない研究分野への勇気ある進出である。しかも、それぞれが相当の研究成果をあげていることもわれわれの承知しているところである。

筆者は、これらの動向をも視野のうちに入れながら、スポーツ文化の「後近代」に対応する、新しい人文・社会科学的アプローチの方法として「比較スポーツ文化論」を提示してみたい。そのために、まずは、「比較スポーツ文化論」の成立根拠を明らかにし、ついで、スポーツ文化の構造と「比較」のポイントについて検討し、さらに、「比較スポーツ文化論」を支える学問分野の広がりについて論じてみたい。そして、そこから、どのような新しいスポーツ文化研究の可能性が展望できるのか、探してみたい。

以上が、本論の課題である。

なお、「比較スポーツ文化論」という構想そのものが、まったく新しい研究分野の模索であるので、とりあえず、本論を「序説」として提示したい。

II. 「比較スポーツ文化論」立論の根拠

さきにも少し触れたように、こんにち現象しつつある新しいスポーツ文化は、もはや、これまでの研究方法論では説明しえないところにきている。スポーツ史的な表

現を借りれば、それは「近代」から「後近代」への大転換期のスポーツ文化であるからである。すなわち、新しい「革袋」に収まるスポーツ文化の理解にはそれにふさわしい方法論が必要なのである。「比較スポーツ文化論」立論の根拠はここにある。

以下には、もう少し詳しく、筆者の考えを提示しておくことにする。

「近代」、とりわけ、「ヨーロッパ近代」という時代が一つの使命を終えて、つぎの時代に突入したという時代認識については、もはや、これ以上の論議を必要としないであろう²⁰⁾。しかし、その結果としてなにか新たな問題となってわれわれの眼前に立ち現れてきたのであろうか。この点についてはいろいろと論議のあるところであろう。ここでは、筆者の考える主なものを取り上げてみたいと思う。

第一点は、核エネルギーの保有である²¹⁾。わけても、原子爆弾の登場は人類史上の事件といってよい。その理由は3つある。

1つは、武器にあらざる武器となったこと。すなわち、武器というものは、元来、敵を攻撃することを唯一の目的としていたにもかかわらず、原子爆弾は攻撃を仕掛けた自分自身をも攻撃する武器になってしまったからである。

2つには、人類滅亡へのストーリーを可視化してしまったこと。キリスト教のいう「最後の審判」や仏教のいう「末法思想」のように、宗教上の教義として人類の未来を抽象的に提示することはあっても、これほどのリアリティをもって人類滅亡のストーリーを語ったものはなかった。

3つには、「競争原理」の大きな弱点が露呈したこと。「自由競争」の原理はヨーロッパ近代を特徴づける重要な理念の1つとして大きな役割をはたしてきた。しかしながら、地下の埋蔵資源と同様に、地球は有限であり、「自由競争」による「予定調和」に委ねておくことはできないということが明確になった。国際的な組織による「核査察制度」が検討されなければならない所以である。

この結果、野放しの「競争原理」や「過剰に」はたらく「競争原理」に一定の歯止めが必要とされるようになった。近代スポーツもまた、ほぼ同じ運命をたどることになった。ドーピングとその規制はその典型的な例といってよい。「過剰な」競争原理がはたらくクラブ活動が忌避され、自分たちの意志が反映できる同好会へ、という傾向もまた同じである。このように、スポーツ文化のいたるところで「過剰な」競争原理を忌避する傾向がしだいに強くなってきている²²⁾。

こうした傾向をどのように考えるのか。あるいは、スポーツ文化にとって競争原理とはなにであったのか。それを歴史という時間軸で考えた場合にどうなるのか。あるいはまた、それを地球上という空間軸で考えた場合にどうなるのか。さらには、スポーツ文化を根本的なところで規定する要因と考えられる「宗教」、「経済システム」、「法律」、「習俗」等々との関係はどうなっているのか。

このように考えてくると、もはや、既成の、スポーツ史とか、スポーツ社会学とか、スポーツ人類学といった単独の学問分野の手にあまることになる。つまり、専門分化してしまった近代の学問体系では対応できないのである。後近代のスポーツ文化を考えるためには、それに対応する後近代の学問体系が必要なのである。近代の学問が専門分化の方向を目指したのに対し、後近代の学問は学際的な統合が求められているといってよい。筆者が「比較スポーツ文化論」を提起する根拠の1つがここにある。

第二点は、「冷戦構造」の崩壊である。あるいは、イデオロギーの終焉である。別のいい方をすれば、いわゆる米ソ二極構造の解体である。そして、「新世界秩序」の再編である。このことの及ぼした影響は多岐にわたる。

たとえば、歴史学の分野では、ある意味で定番化していたマルクス主義史観と啓蒙史観との対立論争が急速に影をひそめることになった²³⁾。代わって「社会史」と呼ばれる歴史の見方が脚光を浴びることになった。あるいは、新たに歴史人類学、歴史民俗学、宗教民俗学、といった分野も注目されるようになった。このことは筆者の専攻するスポーツ史の分野でも起こっている。たとえば、「単純な」マルクス主義史観や啓蒙史観ではもはや通用しないのである。その代わりに、新しい学問分野としてスポーツ人類学が脚光を浴びることになる。このような変動をどのように考えるのか。

つまるところ、マルクス主義史観も啓蒙史観もヨーロッパ近代が生み出した「進歩発展史観」の双生児だったのである。この「近代史観」では説明不能の事態が世界史的規模で起こったのである。この事態に既成の学問はいかにして対応可能なのであろうか。

「冷戦構造」の崩壊は、同時に、「新世界秩序」を模索する時代への幕開けでもあった。ヨーロッパ近代が突き詰めた「米ソ二極構造」という世界秩序に代わる、後近代の世界秩序が模索されることになったのである。その意味で旧トルコ帝国の夢を再現させようとするイラクの意志表示は、アメリカの論理に真っ向から対立するものとなる。

わたしたちは、いつの間にやら、「米ソ二極構造」のなかでものごとを考える習慣に慣らされてしまってきたが、ここきて「世界」というものをどのように認識するのか、という重大な問題に直面することになった。スポーツ文化にとって「世界」とは何か²⁴⁾。この問いに真正面から応えうるスポーツ科学の専門学は存在しないのである。

ここにも、筆者が「比較スポーツ文化論」を提起する根拠の1つがある。

第三点は、近代国民国家の衰退と民族問題の浮上である。ヨーロッパ近代の生み出した「国民国家」というシステムは多数民族のもとに少数民族を従属せしめる装置としてみごとに機能してきた。しかし、その統率力が弱まってくると多年にわたる少数民族の鬱積が一気に噴出するところとなった。

その結果、これまでほとんど伝えられることのなかった「民族問題」が、初めてわれわれの視野の内に入ってきた。しかも、その根の深さはわれわれの想像を絶するものがある。とりわけ、1つの国家のなかにいくつもの言語や宗教や民族が棲み分けてきた事実、そして、その秩序が崩壊してしまった後の、新たな調和の道をつくることの困難さは、われわれの理解不能の領域である。つまり、ヨーロッパ近代の論理では、もはや、対応不能なのである。

このことは、民族スポーツの根底にかかわる問題でもある。すなわち、民族のアイデンティティを規定する言語や宗教と同列に民族固有のスポーツ文化を位置づけることができるからである。このことについて、われわれはあまりに無知でありすぎる。なぜなら、それぞれの民族に固有のスポーツ文化についての情報があまりに不足しているからである。われわれは、近代国民国家という枠組みのもとでほとんど無視され、排除されてきた少数民族のスポーツ文化に、いまこそ真正面から光を当て、われわれの「世界」認識の一助とすべきである。

同時に、近代国民国家とスポーツ文化（体操運動や舞踊革命もふくめて）との緊張関係にも光をあてる必要がある。つまり、近代国民国家に迎合していったスポーツ文化と、それに激しく抵抗した労働者スポーツ運動、あるいは、植民地支配のために利用されたスポーツ文化とそれに対抗した民族スポーツ、さらには、近代国民国家の秩序維持のために弾圧され、禁止された少数民族固有のスポーツ文化、等々、きわめて広い視野に立つ「比較スポーツ文化論」が急務となっているのである。オリンピック・ムーブメントの「功罪」もまた、この延長線上に捉えることができる。

ここにも、筆者が「比較スポーツ文化論」を提起する根拠を求めたい。

第四点は、国際化と伝統の問題である。国際化の進展とともに国際理解の問題が浮上し、お互いの「伝統」の理解なしには真の国際理解は不可能だ、といわれている。しからば、この「伝統」とはなにか、これがまた大問題である。

この問題はスポーツ文化に置き換えて考えてみるとわかりやすい。たとえば、1993年に東京で開催された「伝統スポーツ国際会議」²⁵⁾を例にとってみよう。ここでは、アメリカのスポーツ人類学者として知られるK. ブランチャード氏をはじめ、多くの外国人参加者からいくつかの提言がなされた。それらのなかで印象に残った提言が2つあった。1つは、アフリカのセネガル代表の提言である²⁶⁾。それによると、われわれの民族スポーツは植民地時代にその大半を失ってしまった、こんにちもなお民族スポーツは衰退の一途をたどっている、その理由は、経済基盤があまりの速さで変化していくので、民族スポーツを温存する母体が崩壊してしまうからだ、というものである。いま1つは、ブランチャード氏の提言である。かれは、われわれ文明先進国が音頭をとって民族スポーツ保存のための支援体制をつくろう、と提案する。そうしないと、人類にとって重要な民族スポーツがやがて姿を消してしまう、と説く。

筆者には、ケニア代表の発言とブランチャード氏の提案との間の、あまりのギャップの大きさのよってきた原因こそが重大関心事であった。ここには、自分たちの民族スポーツをみる「まなざし」と、途上国の民族スポーツを上から見下ろす「まなざし」の違いを見てとることができる。この違いこそが重大なのである。

こと民族スポーツに関する国際理解を1つとってみても、これである。しかも、ブランチャード氏はスポーツ人類学の専門家である。まして、われわれの立場はもっと未熟なところにあるといわねばならない。それは民族スポーツに関する情報が質・量ともに圧倒的に不足しているからである。まして、民族スポーツのよって立つ基盤がどこにあって、それがその民族社会にあってどのような機能をはたしているのか、という点についてはまるで理解を欠いている。したがって、うっかりすると、ブランチャード氏の「ヨーロッパ・ヒューマニズム」に基づく発言に足元をすくわれてしまうのである。

こうしたギャップを埋め合わせていくためにも、「比較スポーツ文化論」を立ち上げ、その研究方法論を充実させていくことが重要であると筆者は考える。

第五点は、スポーツ文化と政治・経済・宗教、などと

の関係である。近代スポーツ擁護論者たちは、ことあるごとに「スポーツは政治や経済や宗教とは無関係である」ということを強調してきた。しかし、いまや、このことばをそのまま信ずる者はいないだろう。しかしながら、では、それらとスポーツ文化はどのように関係しているのかと問われれば、その解答に窮する。とりわけ、宗教とスポーツ文化との関係は、これからのスポーツ文化を考えていく上できわめて重要なポイントになろう、と筆者は切実に考えている²⁷⁾。その意味でも、われわれはもっともっと視野を拡大していった、スポーツ文化をホリスティックに理解する道を求めねばならないだろう。

第六点は、文化のクレオール化現象をめぐる問題であり²⁸⁾、第七点は、電腦化社会²⁹⁾の到来とスポーツ文化の問題である。これらについては、いずれ稿を改めて論じてみたいと思う。

以上、述べてきたように、「比較スポーツ文化論」は時代の要請なのである。それは、近代スポーツの論理とはことなる後近代スポーツの論理の模索でもある。そのためにも、スポーツ文化にかかわる人文・社会科学のすべての学問分野を動員するだけでなく、新たな学際的な学問分野を立ち上げていくことが「比較スポーツ文化論」の充実にとって必要であろう。

III. スポーツ文化の構造と「比較」の視点

—スポーツ文化の中心と周縁を手がかりに—

ひとくちに「比較スポーツ文化論」といっても、スポーツ文化のなにを「比較」するのかを明らかにする必要がある。そのためには、まず、スポーツ文化の「構造」をどのように理解するかが問題になる。そこで、ここでは、まず、スポーツ文化の中心と周縁という概念装置³⁰⁾を手がかりにしながら、スポーツ文化の構造と「比較」の視点について、私見を展開してみたい。

スポーツ文化の中心と周縁については、すでに、論じたことがあるので³¹⁾、ここでは少し違った角度から検討してみることにする。

たとえば、近代スポーツの中心と周縁を考えた場合、つぎのように説明できる。広義のスポーツ文化は、近代スポーツの中心に向かって積極的にはたらきかけるスポーツ＝セントラル・スポーツと、近代スポーツの周縁に定着して、近代スポーツになることを拒否するスポーツ＝マージナル・スポーツ³²⁾の2つに分類することができる。

近代スポーツにとってセントラル・スポーツであるものは、別の言い方をすれば、スポーツの「近代化」路線

を受け入れたグループのことである。したがって、これらはルールを成文化し、施設・用具を規格化し、いつでも、どこでも、だれでも、同じ条件で同一のスポーツを楽しむことができるようになる。さらに、大きな競技場をつくり、大観衆の前でそれを見せる興行も可能となる。これをスポーツの「工業化」あるいは「産業化」という意味でインダストリアル・スポーツと呼ぶこともできる。

他方、近代スポーツにとってマージナル・スポーツであるものは、スポーツの「近代化」を拒否したり、拒否されたりしたグループのことである。いずれにしても、このグループは「近代化」をしないで、前近代的な、地域や民族に固有の習俗のなかにしっかりと根をもち、自分たちで納得のいく方法でスポーツを楽しむ。これらを、いわゆる「土着的」な色彩を色濃く残しているスポーツ文化という意味でバナキュラー・スポーツ³³⁾と呼ぶこともできる。

この両者は、1つの理念型であって、すべてのスポーツ文化がこの両極に分かれるわけではない。むしろ、この両者の中間に位置づくスポーツ文化が無数に存在する。問題は、この両者とどのような位置関係、緊張関係、距離関係を保ちつつ個々のスポーツ文化が存在しているか、ということを見極めることであろう。そのためには、セントラル・スポーツ（＝インダストリアル・スポーツ）のメルクマール（徴表）を抽出して提示することが先決である。同様に、マージナル・スポーツ（＝バナキュラー・スポーツ）の特質を形成するメルクマールを明示しなければならない。

この中心と周縁という概念装置は、ひとり近代スポーツだけでなく、どの時代のスポーツ文化にも、どの地域のスポーツ文化にも、そして、どの民族スポーツにも有効な分析方法である、と考えてよい。つまり、中心と周縁、すなわち、「インダストリアル性」と「バナキュラー性」を1つのスケールにして、個々のスポーツ文化の位置づけができる、というわけである。そして、個々のスポーツ文化のメルクマールが明確になれば、それを軸にした「比較」が可能となってくる。これらのメルクマールの精度が高くなればなるほど、その分だけ「比較」の精度も高くなる。

もう少し具体的な例を挙げて説明してみると以下のようになろう。

たとえば、西洋のスポーツ文化と東洋のスポーツ文化とを「比較」しようとする時、当然のことながら、西洋のスポーツ文化の特質はなにか、そして、東洋のスポーツ文化の特質はなにか、ということが問題になって

くる。

ひとくちに、西洋のスポーツ文化といっても、事情は単純ではない。たとえば、西洋のはじまりをどこに置くか（時間）、西洋とはどこからどこまでを意味するのか（空間）の問題もある。あるいは、西洋を「ヨーロッパ」と同義に解釈すれば、ヨーロッパ世界が姿を明確にするカール大帝³⁴⁾の登場以後ということになるし、カール大帝の支配権力の拡大とともにヨーロッパ世界は拡大していく。しかも、時代とともにヨーロッパ世界のひろがりも変化していく。さらに、カール大帝の支配権力の拡大とは、とりもなおさず、キリスト教文化圏の拡大でもある。つまり、西洋をヨーロッパ世界と同義と解釈した場合には、それはキリスト教文化圏を意味することにもなる。このような前提に立てば、西洋のスポーツ文化とは、キリスト教と折り合いのついたスポーツ文化、ということになる³⁵⁾。

ここで問題になるのは、ヨーロッパ世界が登場する前の西洋のスポーツ文化である。ということは、キリスト教が布教される以前の西洋の土着信仰にもとづくスポーツ文化ということになる。それらは、キリスト教の側からすれば、すべて「異教」信仰にもとづくスポーツ文化ということになり、厳しい弾圧の対象となる。このキリスト教と異教との対立抗争、妥協、そして、キリスト教による異教習俗の「取り込み」=「合理化」³⁶⁾のプロセスが、西洋のスポーツ文化の大きな特色となっている。

つまり、ひとくちに、西洋のスポーツ文化といっても、ことからは単純ではなく、まして、その特質を抽出するとなると容易ならざる作業が必要である。このことは「東洋のスポーツ文化」といった時も、まったく同様である。それどころか、時間的にも、空間的にも、もっともっと構造的には複雑である。にもかかわらず、これまで人びとはいとも気軽に西洋のスポーツ文化と東洋のスポーツ文化の違いを語ってきた。そこには明らかに「ヨーロッパ近代」を上位とする文化価値の序列化が前提となっていて、その範囲内での「比較」でしかなかったのである。つまり、「ヨーロッパ近代」の尺度で計って、その「進歩」の度合いを知れば、それでこと足れりとしてきたのである³⁷⁾。それは「近代」という時代認識のもとでは許されることであったとしても、「後近代」という時代認識のもとでは許されないどころか、もはや犯罪的ですらある。

東洋のスポーツ文化の場合をもう少し考えてみよう。東洋の文化圏を分かちもっとも大きな特質はやはり宗教であろう。だとすれば、東洋には、世界宗教とよばれるほとんどの宗教が広く分布している。すなわち、ヒン

ドゥー教、仏教、イスラム教、キリスト教、などである。しかも、それらにつづく道教、儒教、なども根強く存在している。その他に、もっとも重要だと考えられる土着の信仰（多神教）が、これらの宗教の基層をなし、お互いに混淆している。このような複雑な宗教観念とスポーツ文化とは密接にリンクしているのである。いわゆる「近代化」から距離をおけばおくほど、土着信仰との結びつきは大きい。有名なバリ島の「ケチャ」などはその典型的な例といつてよい³⁸⁾。

しかも、これらの問題のほとんどは手つかずのままというのが実情である。したがって、東洋のスポーツ文化の「構造」そのものをどのように理解するか、ということ自体が難題なのである。まして「比較」ができるようになるまでには相当の道のりがあることを覚悟しなければならない。だからこそ、「比較スポーツ文化論」を立ち上げ、広い視野に立つ「スポーツ文化論」を展開していくことが急務となる。

もう一步踏み込んでおけば、西洋とか、東洋という括り方そのものの問題性が、「比較スポーツ文化論」の精度を高めていくプロセスで明らかになるはずである³⁹⁾。なぜなら、文化の固有性が明らかになればなるほど、西洋とか、東洋という括り方がそぐわなくなり、やがてそれらの概念は解体されていくことになる、と思われるからである。すなわち、「後近代」のスポーツ文化を語るにはそれに代わる、もっと精度の高い、新たな概念が必要になってくるからである。

以上、述べてきたように、スポーツ文化の構造と「比較」の視点とは相補関係にあるのであって、両者はつねにフィードバックしながら、お互いの精度を高めていくことになる。したがって、現段階で提示できるスポーツ文化の構造も、そして、スポーツ文化の「比較」の視点も、これまでのスポーツ文化論の蓄積の上に立つものでしかありえず、おのずからの限界がある。まして、これからの、人文・社会科学の学際的で、ホリスティックなスポーツ文化論を展開しようという「比較スポーツ文化論」にとつての「比較」の視点を提示することには、いさかためらいがある。しかし、とりあえずは、現段階でみえていて、きわめて重要だと思われるいくつかの「比較」の視点を、こんごの議論を活性化させる意味で提示しておくことにしよう。

まず第一点は、「宗教」であろう。なぜなら、スポーツ文化の最古層を形成しているものは宗教である、と考えるからである⁴⁰⁾。人が文化として身体を動かしはじめたのは宗教的動機による、と考えるからである。それは、呪術としての身体技法であろう。やがて、それは1つの

様式をもった「舞い」や「踊り」になったと思われる。この「舞い」や「踊り」のなかにさまざまな武術がカミ（超越神）への奉納として埋め込まれていく。あるいは、生産労働にまつわる身体所作が埋め込まれていく。あるいはまた、並みの人間には不可能なアクロバティックな所作も埋め込まれていく。やがて、それらの身体技法は独自の展開をみせ、固有のスポーツ文化としての地位を築いていく……これらは1つの仮説である。これらの仮説が、アニミズムやシャーマニズムとどのように関わっているのか、その土地に固有の土俗信仰とはどうであったか、一神教や多神教との関係はどうか、といった問いに答えられる研究が必要であろう。なぜなら、こんにちのスポーツ文化の「ルール」や「マナー」の多くは、このような宗教的な祭祀儀礼と密接な関係をもっていると考えられるからである。

以下は、紙数の関係で、ごく簡単にふれることにする。

第二点は、「生業形態」であろう。主たる生業がなにであるか、そのこととスポーツ文化の関係に光を当てること。狩猟・採集民、農耕民、漁労民、牧畜民、山地住民、遊牧民、等々によって発案され、享受されるスポーツ文化は異なるのか、あるいは共通するのか。既成概念にとられない事実関係を明らかにしていくことが重要である。

第三点は、「戦闘形態」。生存競争の根底にかかわる身体技法。敵に襲われれば、みずから身を守るしか方法はない。素手で闘う格闘技はもとより、石や棍棒は最初の武器であったであろうし、それらを扱う技術もいろいろに創意・工夫が繰り返されてきている。戦闘形態のさまざまな段階とスポーツ文化との関係はどうなっているのか、なにが、どのように、スポーツ文化を規定するのか、など。

第四点は、「政治形態」。いわゆる、まつりごとの形態がどのようなものであるのか、そのこととスポーツ文化との関係。「法律」（ルール）はここから派生する。

第五点は、「経済」。マルクス主義史観に立てば、下部構造。経済の状態とスポーツ文化の関係。「余暇」はここから派生。

第六点は、「共同体」。共同体の形成の仕方や共同体意識などとスポーツ文化の関係。共同体の理論は「身体」と密接にかかわっており⁴¹⁾、また、個人の「アイデンティティ」の問題とも密接な関係にある。クラブへの帰属やチーム・ワークなど。

スポーツ文化そのものの「比較」の視点をいくつか挙げるとすれば以下のとおり。第七点は、スポーツの「技術」（「戦術」）。技術体系や技術の伝承の仕方、など。「用

具」や「施設・設備」、「服装」、などはここから派生する。

第八点は、スポーツの「組織」（あるいは、「管理」、「運営」、など）。スポーツ文化を担う集団がどのように「組織化」されているのか、それが共同体とどのように機能しているのか、など。

コンテンポラリーな「比較」の視点を挙げるとすれば、

第九点は、「競争原理」。古来、「競争原理」はスポーツ文化のなかで、どのように機能してきたのか。あるいは、この「競争原理」が「政治」や「経済」とどのように関係しながら、スポーツ文化の特質を形成してきたのか。

以上の九点は、やや古い時代をイメージしてコメントしたが、これらはいずれの時代・社会にも有効な「比較」の視点である、と考えている。第十点以下の視点については残念ながら割愛する。

これらの「比較」の視点は、研究対象によって大きく変わってこよう。また、研究の進展によって、さらに細分化され、詳細な視点が設けられることになる。「比較スポーツ文化論」は、スポーツ文化の構造を明らかにしていくことと、「比較」の視点の精度を高めていくことが同時に進行していく、これからの学問領域なのである。

IV. 「比較スポーツ文化論」を支える学問分野

すでに述べてきたように、「比較スポーツ文化論」は、スポーツ文化を、ヨーロッパ近代の価値観にもとづく序列化の軌から脱して、後近代的な理解、すなわち、文化の違いをお互いに対等に認め合いながら相互に尊重し合う、そういう地平に位置づけることを志向する。そのためには、まずは、近代的な学問体系の枠組みを超越した、学問間のインタラクティブな協力体制を構築していくことが必要である。すなわち、専門分化することを目指した近代科学の方向とは逆に、学際的な領域への拡大が求められる時代、これが後近代なのである。

一専門学の内圧が高まってくれば、そして、研究対象の理解の仕方に変化が出てくれば、おのずから、その枠組みのなかには収まり切らない研究の道が開けてくるのは、1つの必然である。われわれは、いま、「スポーツ文化」理解について大きな岐路に立たされている。すなわち、「近代」のスポーツ文化理解から「後近代」のそれへと。「比較スポーツ文化論」はこのような認識の上に立つ、あたらしい学問領域としての道を模索するものである。

しかしながら、われわれは、いま、その途についたばかりである。したがって、現段階では、これまでの研究の実績にもとづいて、これからあるべき「比較スポーツ

文化論」を構想するにとどまらざるをえない。かかる前提に立って、「比較スポーツ文化論」を支える学問分野について私見を展開してみたい。

筆者の寄って立つ学問分野はスポーツ史とスポーツ人類学である。もう少し精確に言えば、出発点は体育史にあった。しかし、「スポーツ文化とは何か」という筆者の問題意識の拡大とともに体育史の方法論では収まらなくなり、スポーツ史へと転じた。「スポーツ文化」へのスポーツ史的アプローチが筆者の目をさらに開かせることになった。それは、近代史学の「進歩発展史観」に疑義を感じはじめると同時に、いつの時代にもほとんど変化しないで温存されている民族スポーツや土着の民俗的な遊戯への関心の高まりとなって現れた。その結果、さらに、スポーツ人類学へと問題関心が拡大していくことになった。ここまで来れば、スポーツ考古学はすぐそこである。以上は、筆者の学問遍歴のほんの一端を要約したものである⁴²⁾。

このような経緯を経てきた上での、いま、「比較スポーツ文化論」の提起である。当然のことながら、筆者の構想する「比較スポーツ文化論」の中核にはスポーツ史がある。そして、このスポーツ史を核にして、もっとも密接にインタラクティブな関係を保持しているものに、スポーツ哲学、スポーツ人類学、スポーツ社会学がある。これらを補完する新しい学問領域として早急に必要性を感じているものに、スポーツ宗教学⁴³⁾、スポーツ考古学⁴⁴⁾、スポーツ民俗学⁴⁵⁾がある。

以上が、「比較スポーツ文化論」を形成するための中核と、それを支えるもっとも重要な6つの専門諸学である、と考える。あとは、「スポーツ文化とは何か」という問いに答えうるすべての人文・社会科学を動員できればよいであろう。しかし、現実にはきわめて厳しく、これらの専門諸学がそれだけの実績を残していないというのが実情である。その意味でも「比較スポーツ文化論」を立ち上げていくことの大きな困難がある。しかし、もはや、猶予はないのである。新しい「スポーツ情況」がつつぎに新展開をみせているなかで、研究体制のみが後追いしているのが現実である。

このような現実とはもかくとして、ここでは「比較スポーツ文化論」を立ち上げるために必要と思われる専門諸学を、とりあえず、列挙しておくことにしよう。

まず、馴染みのある分野としては、スポーツ人間学、スポーツ教育学、スポーツ心理学（ただし、フロイト、ユングの系譜につらなる心理学）、などがある。最近、注目されつつあるものとしては、スポーツ法学⁴⁶⁾、スポーツ産業学⁴⁷⁾、スポーツ環境論⁴⁸⁾、スポーツ地理学⁴⁹⁾、ス

ポーツ・ジャーナリズム論⁵⁰⁾、などがある。さらに、これから立ち上げていかねばならない重要な学問分野に、スポーツ情報学、スポーツ図像学⁵¹⁾、比較スポーツ文学⁵²⁾、スポーツ経済学⁵³⁾、スポーツ政治学⁵⁴⁾、などがある。

これらの専門諸学がそれぞれに実績をあげ、内圧が高まってきて、お互いにインタラクティブな協力関係ができてくる時、「比較スポーツ文化論」は大きな意味を持つことになるであろう。理想はともかく、まずは「隗より始めよ」ということわざどおり、できるところから着手する以外に方法はない。とりあえずは、このような構想を描きながら、「比較スポーツ文化論」をめぐる論議を活性化させていくことを期待したい。

以下には、上に挙げた専門諸学のうち、とくに説明を必要とすると思われるものを2つだけ取り上げて、若干のコメントをしておきたい。

まず最初に、スポーツ情報学。ここでいうスポーツ情報学は、いわゆるコンピューターを用いた「情報処理」の技術をいうのではなく、スポーツ科学の諸分野で蓄積される新しい知見を「情報化」（データ・ベース化）するための学問分野のことを意味する。つまり、スポーツ科学の諸成果を情報化するための、独自の対象、領域、方法を開発していく学問分野のことである。

スポーツ史を例にとると以下のようなだろう。ひとくちに、スポーツ史といっても、その守備範囲はきわめて広く、多様である。たとえば、空間軸で考えてみても、世界スポーツ史、外国スポーツ史、西洋スポーツ史、東洋スポーツ史、ドイツ・スポーツ史、日本スポーツ史、奈良県スポーツ史、奈良市スポーツ史、ならまちスポーツ史、と際限がない。また、時間軸で考えてみても、通史、古代・中世・近世・近代・現代スポーツ史、古代エジプト・スポーツ史、ヨーロッパ中世スポーツ史、明治スポーツ史、という具合でこれもまた際限がない。あるいは、ジャンル別に考えてみても、球技史のもとには、野球史、バスケットボール史、テニス史、などが展開し、さらに、ボールの歴史、ラケットの歴史、などが続き、どこまでも細分化が可能なのである。これらは、スポーツ史で考えられている研究領域のほんの一部にすぎない。

このような視点に、文献情報、図像情報、ドキュメント情報、などといった別の視点をクロスさせると、さらに複雑になる。こうなると、もはや、スポーツ史の手には負えなくなる。では、スポーツ史の研究成果を「情報化」するにはどうしたらいいか、ここにスポーツ情報学の出番が回ってくることになる。つまり、スポーツ史と

スポーツ情報学のインタラクティブな協力関係が必要になる。

スポーツ情報学は、こうした関係をすべてのスポーツ諸科学と結んでいくことになる。その過程で、スポーツ諸科学の固有の情報化とは別の、スポーツ情報学に固有の方法論が生まれてくるものと予測される。当然のことながら、スポーツ情報学が独立科学として一本立ちするまでには相当の紆余曲折が考えられる。しかし、ひとたび、スポーツ情報学が確立された暁には、まるで予測不能の威力を発揮するに違いない。このように考えてくると、「比較スポーツ文化論」は、ひたすら、スポーツ情報学のこんごの進展いかんにかかっているといっても過言ではない。

そればかりではない。すでに、急展開をみせている「電脳化社会」にむけて、スポーツ情報学に寄せる期待は絶大である。それにひきかえ、スポーツ文化の人文・社会科学的アプローチをめざしている専門諸学の遅れは急を要するといわねばならない。

つぎは、スポーツ宗教学。スポーツと宗教の関係は、これまで、どことなく忌避されてきた節がある。これは洋の東西を問わず同じである。これは、近代論理からすれば当然のことで、マルキシズムがそうであったように、宗教はできるだけ排除した文化の創造が是とされた。近代スポーツも同様に、宗教色をいかに排除するか、ということに腐心した。いまや、近代論理の呪縛からいかにして脱出するのか、という時代である。そこで、にわかに登場してきた問題が宗教である。人は科学のみでは生きられないのである。人智をこえるものへの畏敬の念は、いつの時代にも変わらない。スポーツのルーツの1つが宗教にあるのはこうした事情による。このことに思いを致して、スポーツ宗教学を立てていくことが、こんごのスポーツ文化論の展開にとってきわめて重要であると、筆者は考える。

以上が、筆者の考える「比較スポーツ文化論」を支える学問分野のアウト・ラインである。ことば足らずになった部分については、いずれ、稿を改めて補足したいと思う。

V. 結論—展望と課題

以上のように、「比較スポーツ文化論」は時代の要請である。すなわち、近代から後近代に移りゆくスポーツ文化を的確に見定め、スポーツ文化の未来像を描くために、必要なのである。同時に、人類にとって「スポーツ文化とは何か」という大きなテーゼに対して、根源的かつホリスティックな解答を見出すための新しい学問領域

なのである。

そのためには、「スポーツ文化とは何か」というテーゼに向かって、人文・社会科学の専門諸学の総力を結集することが必要であり、そこにインタラクティブな協力関係を築いていくことが重要である。のみならず、各専門諸学の内圧を高めていって、学際的な研究領域を開発していくこと、さらには、これまでにはなかったまったく新しい研究領域を積極的に立ち上げていくことが必要であろう。

なかでも、スポーツ情報学とスポーツ宗教学の成立が急がれる。とりわけ、スポーツ情報学は「比較スポーツ文化論」の展開にとって重要である。なぜなら、「スポーツ文化」に関する膨大な情報を体系的に蒐集し、分類し、活用できるように道を開くばかりでなく、これからの電脳社会に対応していく上で不可欠であるからである。

しかしながら、「比較スポーツ文化論」の中核をなす専門学はスポーツ史である、と筆者は考える。このスポーツ史を中核にしてスポーツ哲学、スポーツ人類学、スポーツ社会学がその周縁を固めることになる。そして、これらの専門諸学が「比較スポーツ文化論」の内包であるとすれば、さらにその外延をその他の専門諸学が取りまくことになる。スポーツ情報学は、これらすべての専門諸学と連携しながら、「スポーツ文化」にかかわる情報を蒐集し、管理し、提供していくことになる。したがって、スポーツ情報学はあくまでも方法上の強い味方なのである。このスポーツ情報をスポーツ史が中核となって「比較」考察・分析していく新しい学問領域、それが「比較スポーツ文化論」の現段階でのアウト・ラインである。

なにはともあれ、「比較スポーツ文化論」に寄せる期待はきわめて大である。

とはいえ、もっとも重要な鍵をにぎるのは研究者個々人の「思想」である。とりわけ、「現代思想」にどれだけ通暁しているかが重要である。この「現代思想」での議論と自分の専門学（筆者の場合にはスポーツ史）とを、いかにリンクさせ、研究の質を高めていくかが、いま、問われているのである。

スポーツ文化の「現在」とは、そういう時代なのである。

「思想」のない「比較スポーツ文化論」は形骸化する。そうならないためにも、われわれは、つねに、みずからの「思想」を鍛えていかなければならない。この点については、いずれ稿を改めて論じてみたいと思う。

注および参考文献

- 1) スポーツそのものだけでなく、スポーツを成立させているもろもろの文化要素も加味して、あえて、スポーツ文化という用語を用いる。ことわるまでもなく、スポーツ文化の中核をなすのはスポーツそのものであり、スポーツの競技種目や技術や戦術である。しかし、それらを成立させるためには用具・施設や服装、監督・コーチ、栄養・休息、などをはじめ、家族や社会の理解・支援が必要であり、さらには道徳や倫理（ルールやマナー）を無視することはできないし、政治や経済までも視野に入れながら、最終的には「宗教」の問題につきあたる。つまり、スポーツを「文化」に比重をおいて、できるだけ広い視野で捉えなおそうという意図から、スポーツ文化という用語にこだわりたい。いうならば、スポーツ史研究をとおして到達した1つの概念装置として、このことばを用いていることを明記しておきたい。
- 2) 「現在」という時代が大きな転換期であるという論調は、筆者にとっては、かなり以前からの主張である。ただ、「現在」を「近代」から「後近代」への移行期であるという認識を明確にもてるようになったのは、比較的最近のことである。その詳しい経緯は省略するが、そのプロセスは以下のとおりである。
 拙稿、ならびに拙著は以下のとおり。「転換期に立つ体育・スポーツ」、『月刊保健体育教室』、大修館書店、1月号、No.136、1979年、2-5頁。/「世界における体育の潮流」、『体育科教育』、大修館書店、12月号、第29巻第13号、1981年、10-14頁。/「ヨーロッパ諸国にみるスポーツ教育の動向と課題」—西ドイツ、ソ連、東ドイツ、オーストリア、スウェーデンの場合、『奈良教育大学紀要』、第32巻第1号（人文・社会科学編）、1983年、129-148頁。/「外国における体育カリキュラム改革の動向」、『学校体育』、日本体育社、1月号、第37巻第1号、1984年、34-40頁。/「スポーツと教育の国際的展望と課題」、『「スポーツと教育」の展開』、丹羽功昭・辻野 昭編著、第一法規、1984年、1-44頁。/「生涯スポーツの未来像と学校体育」、『学校体育』、日本体育社、1月号、第41巻第1号、1988年、22-27頁。/「スポーツ史研究の現代的視角」—ヨーロッパ・スポーツ史研究の立場から、『スポーツ史研究』、スポーツ史学会、第3号、1990年、25-31頁。/「後近代社会のスポーツ」、『図説スポーツ史』、寒川恒夫編集、朝倉書店、1991年、156-188頁。/「スポーツ史研究の現代的視角を探る」、平成2年度水野スポーツ振興会研究助成金研究報告書『スポーツ史研究の現代的視角』、研究代表・稲垣正浩、1991年、3-22頁。/「新しいスポーツの潮流」—その文化史的考察、『体育科教育』、1月号、第40巻第1号、大修館書店、1992年、14-18頁。/「スポーツ文化の『現在』を考える」、『学校体育』、10月号、第45

- 巻第11号、日本体育社、14-16頁。/「Jリーグ現象の1年」—近代に対する反逆・魂に響くもの求める、『朝日新聞』名古屋本社、「文化」欄、1993年12月24日夕刊。/「いま、なぜ、近代国民国家と体操運動なのか」、平成5年度水野スポーツ振興会研究助成金研究成果報告書『国民国家と体操運動』、研究代表者・松尾順一、1994年、1-10頁。/「新しいキーによるスポーツ」—下降志向のスポーツの可能性、『日本語論』、6月号、第2巻6号、山本書房、1994年、56-84頁。/「現代認識と近代スポーツ」、『体育の科学』、杏林書院、9月号、第44巻第9号、1994年、702-706頁。/「これからの生涯スポーツ振興とファミリースポーツ」、『スポーツと健康』、11月号、第26巻第11号、文部省体育局監修、1994年、5-8頁。/「ニュースポーツの誕生とその背景」、『体育科教育』、1月号、第43巻第1号、大修館書店、1995年、10-13頁。/「踊る身体」の復権、『ぶっくれと』、No.113、三省堂、1995年、36-41頁。/「いま、なぜ、『気』なのか」、『ぶっくれと』、No.114、三省堂、1995年、20-26頁。/「下降志向」のスポーツ文化論—「気」をとおしてみえてくる新地平、平成6年度水野スポーツ振興会助成金研究成果報告書『今なぜ「気」なのか?—「気」ブームのスポーツ史的意味を探る』、研究代表者・松本芳明、1995年、101-106頁。/「踊る身体」考、『女子体育』、3月号、第37巻第3号、(社)日本女子体育連盟編集、1995年、4-7頁。/稲垣正浩・谷釜了正編著、『スポーツ史講義』、大修館書店、1995年。/「スポーツの『現在』を考えるために」、『学校体育』、4月号、第48巻第4号、日本体育社、1995年、74-77頁。/「スポーツの後近代」—スポーツ文化はどこへ行くのか、三省堂、1995年、247頁。/「曲がり角に立つスポーツ文化」—「上昇志向」から「下降志向」へ、『体育科教育』、1月号、第44巻第1号、大修館書店、1996年、14-17頁。/稲垣正浩、野々宮 徹、寒川恒夫、谷釜了正：『図説スポーツの歴史』、大修館書店、1996年、264頁。
- 3) 競技スポーツとは、ドイツ語では、Spitzensportと表記する。その意味するところは、まさに、「頂点に立つスポーツ」(Spitzen=頂点)である。こういう用語の背景にピラミッド型の価値の序列化が明確にあらわれている。「近代」という時代はそういう時代の典型であったからである。その意味では、競技スポーツのことをSpitzensportと名付けたのは当然の帰結であった、といつてよい。
 - 4) 拙稿、「ニュー・スポーツ」考—「ニュー・スポーツ」の『ニュー』とは何か、そのスポーツ史的アプローチ、平成4年度水野スポーツ振興会助成金研究成果報告書『ニュースポーツとは何か』—そのスポーツ史的考察、ニュースポーツ研究会代表・野々宮 徹、1993年、17-36頁。/「ニュースポーツの誕生とその背景」、『体育科教育』、1月号、第43巻第1号、大修館書店、1995年、10-

13 頁。

- 5) 「後近代」は英語の Post Modern の直訳である。これまでに「脱近代」、「ポストモダン」、「ポスト近代」などの訳語があり、広く用いられている。しかし、これらの訳語はいずれもそれなりの歴史的な役割を担って用いられてきており、すでに、もともとの Post Modern という意味とは異なる意味内容を付与されている。そこで、筆者は「前近代」=Pre Modern に対応する「後近代」=Post Modern という訳語を当てることにした。つまり、英語の本来の意味である「近代」をはさんでその前後に位置づけられる時代としての「前近代」と「後近代」という意味である。
- 6) 『思想』2月号(1996年、岩波書店)では、「カルチュラル・スタディーズ」という特集を組んで、最近の動向を論議している。とりわけ、「多文化主義」と「文化多元主義」に関する論議が筆者の関心事に近いものであり、こんごの論議がどのように展開されるのか注目される。
- 7) 岸野雄三:『体育の文化史』、不昧堂出版、1959年。
- 8) 岸野雄三:『体育史』—体育史学への試論、大修館書店、1973年。
- 9) 岸野雄三・朝比奈一男・水野忠文:『スポーツの科学的原理』、大修館書店、1977年。
- 10) 岸野雄三編著:『序説運動学』、大修館書店、1968年。
- 11) 岸野雄三編著:『スポーツの技術史』、大修館書店、1972年。
- 12) 岸野雄三のかねてから(筆者の学生時代から)の持論でもあった「スポーツ人類学」の確立は、その後継者である寒川恒夫によって実現した。1990年の日本体育学会スポーツ人類学専門分科会の承認がそれである。
- 13) ル・ロウ・ラデュリ著、樺山紘一、木下賢一、相良匡俊、中原嘉子、福井憲彦訳:『新しい歴史』—歴史人類学への道、新評論、1980年。/湯浅赳男:『文明の歴史人類学』—「アナール」・ブローデル・ウォーラステイン、新評論、1985年。/福井憲彦編:『歴史のメソドロギー』、新評論、1984年。
- 14) 網野善彦・宮田 登・福田アジオ編:『歴史学と民俗学』、日本歴史民俗論集・1、吉川弘文館、1992年、ほか。
- 15) 比較文明学会、『比較文明』・1、刀水書房、1985年。
比較文明学会は1983年創設。この学会の母体は1978年に発足した「文明論研究会」で、発起人は谷川徹三、代表は山本 新であった。当初この学会では、「比較文明の地平」を支える柱として、1.原理、2.方法、3.要因、4.地域、5.歴史を構想している。この学会の試みてきたことから、筆者の考える「比較スポーツ文化論」にとってもきわめて重要な示唆に富むものである。
- 16) 最近の比較神話学の成果にはめざましいものがある。なかでも、もっとも印象に残っている文献を

一冊挙げるとすれば、つぎのものである。

- G.デュメジル著、大橋寿美子訳:『ローマの祭』—夏と秋、法政大学出版局、1994年。言語学、文献学、考古学、社会学を駆使して古代ローマの謎に迫る。この手法は筆者が長年手がけている「バスクの民族スポーツ」の謎解きにも大いに役立っている。比較神話学の金字塔といってよい。
- 17) 宮家 準:『宗教民俗学』、東京大学出版会、1989年。/宮家 準:『宗教民俗学への招待』、丸善ライブラリー、1992年。/山折哲雄:『仏教民俗学』、講談社学術文庫、1993年。/佐々木宏幹:『シャーマニズムの世界』、講談社学術文庫、1992年。
- 18) 鎌田東二:『人体科学事始め』—気を科学する、読売新聞社、1993年。/湯浅泰雄:『「気」とは何か』—人体が発するエネルギー、NHKブックス、1991年。/日本の「人体科学会」は1991年12月に設立された。中国では1987年5月に「中国人体科学会」が正式に発足した。英語では Mind Body Science という。それまで「気」に科学的な光をあてるということはあまり問題にされることがなかった。しかし、人体科学会の発足によって、中国と日本で本格的な科学的なメスが入られることになった。しかも、ありとあらゆる学問領域の専門家が結集して、これまでにない超学問領域を設定することによって、それは可能となった。こんごの成果が期待される。
- 19) F.カブラ著、吉福伸逸、田中三彦、島田裕巳、中山直子訳:『タオ自然学』、工作舎、1979年。/世界的に著名な物理学者フリッツォフ・カブラの著書で、量子力学と東洋の思想の共通性を論じたもの。この本が契機となって「ニュー・サイエンス」と呼ばれる新しい学問領域が大きな関心を呼んでいる。F.カブラの主張によれば、現代科学の最先端と東洋の神秘主義の奥義とは共通するものがあるので、この両者にブリッジをかけて、新しい「サイエンス」への道を切り開くことによって、これまで科学的に立証不明とされてきた多くの「超常現象」を証明できるという。
- 20) 西谷 修:『西欧の歴史の臨界』、『Representation』、002、編集・高橋康也、渡辺守章、蓮實重彦、筑摩書房、1991年、164-173。/西谷 修:『ヨーロッパの臨界』、『文藝』、春季号、河出書房新社、1993年、293-309頁。/西谷 修:『夜の鼓動にふれる』—戦争論講義、東京大学出版会、1995年。
- 21) 寒川恒夫編:『図説スポーツ史』、朝倉書店、1991年。近代の「競争原理」の限界を如実に語ってみせたのは、その近代科学が到達した「核エネルギー」の開発であった、というのが筆者の持論である。
- 22) ニュー・スポーツや生涯スポーツの展開にもそのことがみとれる。他者との「競争」よりも自分自信の内面の充足の方を求める傾向も同一線上にある。近代スポーツはまさにその「競争原理」によって独自の性格を明確にしたのに対し、この

- 「競争原理」に一定の距離を保とうとするスポーツ文化が登場しつつある。
- 23) ピーター・パーク編, 谷川 稔, 谷口健治, 川島昭夫, 太田和子, 他訳:『ニュー・ヒストリーの現在』—歴史叙述の新しい展望, 人文書院, 1996年, 337頁。
 - 24) 稲垣正浩, 野々宮 徹, 寒川恒夫, 谷釜了正:『図説スポーツの歴史』—世界スポーツ史へのアプローチ, 大修館書店, 1996年。この本は, 当初, 「世界スポーツ史」を意図して構想が練られた。したがって, スポーツ文化にとって「世界」とはなにか, スポーツ文化の「世界史」はどのように描くことができるのか, ということが著者たちの共通のテーマであった。その意味ではわれわれ著者の「世界認識」の仕方が, この本には如実に現れているといつてよい。
 - 25) 寒川恒夫・監修, 伝統スポーツ国際会議実行委員会・編:『21世紀の伝統スポーツ』, 大修館書店, 1995年。/「伝統スポーツ国際会議」は1993年3月11・12日の二日間にわたって, 早稲田大学国際会議場において開催された。
 - 26) セネガルの代表はガブリエル・ディウフ氏(青年スポーツ省局長)で, 「セネガルの伝統スポーツ」という演題で報告が行われた。氏のまとった民族衣装とその物静かな語り口に品格を感じさせた。それだけに氏の提言は胸を打つものがあり, 強烈な印象となつていまも忘れがたく残っている。
 - 27) 拙著:『スポーツの後近代』, 三省堂, 1995年。
 - 28) 西谷 修:「歴史の終り」に帰属するもの—クレオール論の現在性, 『UP』, 264号, 東京大学出版会, 1994年, 1-7頁。/パトリック・シャモフゾー+ラファエル・コンフィアン著, 西谷 修訳:『クレオールとは何か』, 平凡社, 1995年。/訳者の解説を一部紹介しておけば以下のようなものである。近年「クレオール」に対して関心が高まっているのは, ただ単に単一性よりも複合性, 純粹さよりも混濁, 分離と対立よりも共存, という生存のモードの選択の問題としてではない。「……」もっともドラスティックな「歴史の災厄」から生まれ出て, 西欧的歴史の原理に対抗する自己を捏造するのではなく, その帰結としての自己をそのまま離脱の方途とする「クレオール」の自己主張が, 大きな示唆を与えているのだ。
 - 29) 立花 隆:『電脳進化論』, 朝日新聞社, 1993年。
 - 30) 山口昌男:『文化と両義性』, 岩波書店, 1975年。大江健三郎, 中村雄二郎, 山口昌男:『中心と周縁』, 叢書・文化の現在・4, 岩波書店, 1981年。/柴田三千雄:『近代世界と民衆運動』, 世界歴史叢書, 岩波書店, 1983年。/山本 新, 神川正彦, 吉沢五郎:『周辺文明論』—欧化と土着, 刀水書房, 1985年。/原 聖:『周縁的文化の変貌』—ブルトン語の存続とフランス近代, 三元社, 1990年。/I. ウォーラーステイン著, 川北 稔訳:『近代世界システム』I, II, 岩波現代選書, 1981年。
 - 31) 拙稿:「近代スポーツの誕生とその背景」, 『体育史講義』, 岸野雄三編著, 大修館書店, 1984年, 95-107頁。
 - 32) 野々宮 徹:「マージナル・スポーツの発想」, 『体育史講義』, 岸野雄三編著, 大修館書店, 1984年, 126-129頁。
 - 33) Vernacular Sports のカタカナ表記。Vernacularには名詞では「地方のことば(方言)」, 形容詞では「その土地固有の」, 「土着の」という意味がある。直訳すれば, 「土着スポーツ」となる。
 - 34) カール大帝 Karl der Große (742~812)。800年ころには, ほとんどのゲルマン部族を一つの国家と一つの宗教, すなわち, フランク王国とキリスト教に統合。ヨーロッパを形成する三大文化要素—古典古代のギリシア文化, キリスト教, ゲルマン民族精神—はカール大帝のもとで完全に融合したと考えられている。
 - 35) 拙稿:「キリスト教とスポーツ文化」, 『新・スポーツ文化の創造にむけて』, 小椋 博監修・天理やまと文化会議編, ベースボール・マガジン社, 1996年, 147-158頁。
 - 36) 「キリスト教的合理化」という表現がもっともふさわしいと考えている。たとえば, イエス・キリストの誕生日であるはずのクリスマスが, もともとは農耕暦の冬至祭を教会暦のなかに「取り込んだ」ものであることはよく知られているとおりである。このような例はいくらでもある。
植田重雄:『ヨーロッパの祭と伝承』, 早稲田大学出版部, 1985年。
植田重雄:『ヨーロッパ歳時記』, 岩波新書, 1983年。
 - 37) ユーロセントリズム(ヨーロッパ中心主義), あるいは, エスノセントリズム(自民族中心主義)の典型的な発想である。ヨーロッパ近代とは, この発想をとことん押し進めた, 恐るべき時代であった。筆者のいう「後近代」はもはやユーロセントリズムを通過して, 異文化間の価値の序列化を排除した, あるがままの文化をあるがまま認める, そういう時代ととらえる。
 - 38) 宮尾慈良:『アジア舞踊の人類学』, PARCO 出版, 1987年。
 - 39) 西洋と東洋という区分そのものが, ある特定のイデオロギーの産物であって, 文化を語るための概念として生まれたものではないから, 当然である。
 - 40) 稲垣正浩, 野々宮 徹, 寒川恒夫, 谷釜了正:『図説スポーツの歴史』, 大修館書店, 1996年。この本のなかで, 舞踊の見方, 考え方についての筆者の持論を繰り返して論じているので, 参照されたい。
 - 41) モーリス・ブランショ著, 西谷 修訳:『明かしえぬ共同体』, 朝日出版社, 1984年。/ジャン・リュック・ナンシー著, 西谷 修訳:『無為の共同体』—バタイユの恍惚から, 朝日出版社, 1985年。/エマニュエル・レヴィナス著, 西谷 修訳:『実存から実存者へ』, 朝日出版者, 1987年。

- 42) 詳しくは、注2)で補足していただきたい。これでも不十分であるが、ある程度の経緯は理解していただけるものと思う。
- 43) 現段階ではまだ存在していないので、注17)に挙げた文献に頼りながら、筆者なりのスポーツ宗教学を模索している。拙稿：「キリスト教、絵画、文学に光を」、『会報』、第1号、スポーツ史学会、1987年、1-2頁。
- 44) 1995年5月28・29・30日に開催された「シルクロード・奈良国際シンポジウム'95」のなかでなされた、考古学者の報告が印象に残っている。なかでも、門田誠一（仏教大学専任講師）の「朝鮮半島の民俗的遊戯と闘技」—研究成果の整理と問題点および考古学的知見、は圧巻であった。同時に提出された詳細な報告書は目を見張らせるものがある。こういうものに接すると、スポーツ考古学の早期実現が待ち遠しい思いで一杯になる。
- 45) 網野善彦・宮田 登・福田アジオ編：『歴史学と民俗学』、日本歴史民俗論集・1、吉川弘文館、1992年。このシリーズは全10巻で刊行された。人びとの生きざまとクロスするスポーツ文化を捉えるには「スポーツ民俗学」が必要なのではないか、と考えている。また、カルロ・ギンズブルグの一連の著作にも大いに啓発されている。
- 46) 日本スポーツ法学会は1992年に設立されている。これからの研究成果が大いに期待されるところである。
- 47) 日本スポーツ産業学会の設立は1991年。
- 48) 中村敏雄：『日本的スポーツ環境批判』、大修館書店、1995年。スポーツ環境論の嚆矢として注目したい。これを契機に議論が活性化することを期待したい。
- 49) John Bale, Sports Geography, E. & F. N. SPON: London, 1989.
- 50) 日本では授業科目として開講されている程度であるが、アメリカには学科や講座も設置されていて、スポーツ・ジャーナリズムの専門教育が行われている。
- 51) 黒田日出男（日本中世史）の図像から歴史を解読する方法にヒントを得たもの。学問としてどのように立ち上げるかはこんごの課題。
- 52) ここでいう「スポーツ文学」は、いわゆるスポーツを主題とした文学という意味ではなく、スポーツ文化と文学とがクロスするジャンルとして考えている。広く文学作品のなかにスポーツ文化がどのように描かれてきたのか、それを「比較」の視点から分析・考察しようというものである。
拙稿：「スポーツ文学論の研究動向」、『体育の科学』、杏林書院、6月号、第43巻第6号、1993年、450-454頁。／「文学作品にみるスポーツの原風景」—スポーツ史は文学から何を学ぶことができるか、『体育の科学』、杏林書院、7月号、第38巻第7号、1988年、541-545頁。
- 53) スポーツ文化に経済学のサイドからメスを入れる必要性がますます高くなってきているので、この分野が早く成立することを期待したい。
- 54) 同上。